

KEYWORD

かわやなぎさわこの
お星さまになりました。

川柳佐和子さんを中心に、どのよう
にしたらお星さま(＝スター)にな
れるか?を考へ行動する団体や
番組のこと。「自由」「共感」「輝き」
をテーマに活動している。
<http://yanastar.com/>

【学生支援プロジェクト】
インターネットネットラジオを通しての
地域貢献プロジェクト

み なさんは「インターネットラ
ジオ」聴いていますか?
視聴エリアを気にすることなく海外
にいても楽しめるネットラジオは、聞
き手だけでなく発信側にとっても手軽
なのが魅力。従来の放送局だけでなく、
個人の情報発信のツールとしても利用
されています。

香川大学の学生である川柳佐和子さん
(法学部4年生)と長井佳祐さん(法学部
4年生)をメインパーソナリティに放送
している「かわやなぎさわこのお星サ
マになりました」も、そんなインター
ネットラジオの一つ。番組はすでに30回
以上配信され、2010年には「インター
ネットラジオを通しての地域貢献プロ
ジェクト」として学生支援プロジェクト
事業にも選ばれました。

第1回の配信がスタートしたのは
2009年6月のこと。商店街でラジオ
配信を行っていたお店が「大学生目線で
放送をしてみませんか?」と放送部に
声をかけたのがきっかけでした。

しかし最初からスムーズに進行でき
たかというところ…

「第1回は聞かないでください(笑)!!
喋るって難しいと痛感しました」と長井

さん。とはいえ今ではそれぞれがFM
コミュニティ放送でパーソナリティと
して活躍したり、2010年11月に開催
されたイベント「ツイッター」緑サミット
香川」で司会を担当するなど、ラジオを
きっかけに活動の幅はどんどん広がって
います。

番組では、お便りを紹介したり、有名
無名を問わず「輝いている」と2人が
考えている人をゲストとして招くなど、
大学生の目から見た様々な企画が盛り
込まれています。意識しているのは、
大学生がやるラジオだから、とくに若い
人に聞いてもらいたい、ということ。

大学3、4年になると、これからどう
社会に出ていくか、何をしたいかとい
けないのか…など、気になることが
出てきます。「周りもみんな悩んでいるん
じゃない?」と考えたとき、その道しるべ
として2人が考えたのが、香川で輝いて
いるこんな人がいますよ、という紹介を
行い、お話をうかがうことでどうすれば
自分たちも輝けるのか考えていこうと
いうことでした。

「印象に残っているのは、パーソナリ
ティとしても活躍している桂こけ枝さん
のお話です。それまでは「パーソナリ

ティはこうしなきゃ」という先入観が
あって、聞いている人が聞きたいこと
を話さなくては…と構えて喋っていたの
ですが、ラジオは音しか伝わらないから
ホンネを話さないと伝わらない、「正味
(しょうみ)なんだよ」と教えていた
だきました」と川柳さん。情報を発信
するための交流は、送り手側の2人に
も大きな成長をもたらしていました。

とくにツイッターなどを利用したりアル
タイムの反応はインターネットラジオの
醍醐味。県外のアーティストから楽曲
提供の提案が来るなど、思わぬ出会い
もあったといいます。

ところで、卒業後のラジオはどうなる
んでしょう?

「自分たちは簡単ではあるけれども
土台を作ったと考えています。このラ
ジオを引き継ぐのではなく、後輩には
一から作り上げてほしい。「この2人に
できるんだから自分にもできる!」と
思っしてほしいです」

自分ができること、伝えられることは
何か。一人一人がそれを考え行動する
ことが、2人が考える香川大学や地域を
お星様のように輝かせる第一歩なのかも
しれません。



サンポート高松内にある「e-とびあかがわ」で収録が行われています。



音響のエンジニアは工学部 藤本 祐毅さんが担当。



どうしたら
自分も輝ける?
輝いている人に
聞いてみよう

香川大学分室 こえび隊

「今回お話を聞いたメンバー」
 経済学部3年 原田 理紗子さん
 経済学部3年 白井 あかりさん
 経済学部2年 福井 陽子さん



KEYWORD

【こえび隊】
 「瀬戸内交際芸術祭」のボランティアサポーターの名称。会期前には作品作りなどをサポートし、会期中は各島に渡って作品の受付やメンテナンス、イベントの運営などを手伝った。日本全国から、性別・年齢を問わず多くのメンバーが参加。

芸術祭を盛り上げた 学生の献身



昨 年10月末に幕を閉じた「瀬戸内国際芸術祭」は、「こえび隊」と呼ばれる公式ボランティアサポーターの貢献が大きかったと言われています。香川大学には、その唯一の分室である「こえび隊香川大学分室」があり、香川大学生が積極的にボランティアとして参加しました。分室は、コアメンバー十数名とサポートメンバー約70名で構成されていて、ほとんどの活動をコアメンバーが行い、サポートメンバーは自分が活動できる日にコアメンバーに付き添うという形で運営されました。

分室は、経済学部「地域活性化研究」の授業に香川県庁の方が参加され、芸術祭のボランティア活動の話がされたのがきっかけで誕生しました。立ち上げメンバーの一人である経済学部3年の原田さんは、「香川大学生として、香川で実施される芸術祭に貢献したかった」と振り返ります。分室が立ち上がったのが、2010年の5月上旬。こえび隊本隊との打ち合わせで、芸術祭のはじまる7月までにメンバーの募集と大学内での広報を行い、芸術祭が始まるまでは、会場のひとつである男木島で、受付やガイドなど一部の作業を担当することになりました。8月19日〜9月末までは、メンバーの誰かが毎日男木島へスタッフとして赴き、芸術祭の運営を手助けしました。

それとは別に、分室から派生した取り組みとして、8月からフリーペーパー「翌朝新聞」を発刊し、芸術祭に訪れた観光客に手渡しました。簡単な観光ガイドを掲載し、新聞を見つけた人に、芸術祭および高松での「明日」の楽しみ方を提案するから「翌朝新聞」第1号を発刊した8月上旬から会期末の10月末日まで、毎日違う内容の新聞を100部、1日も欠かさず発刊し続けました。

分室での活動を通じ、原田さんは、自分から行動をおこす大切さを学んだと言います。「今までは、思っているだけでなかなか行動に移せなかったんですが、今回、自分から一歩踏み出してみるとバツと目の前が開きました。この一歩踏み出す勇気を、これからも忘れません」

原田さんと同じコアメンバーで、翌朝新聞発刊に携わった経済学部3年の白井さんは、学生生活の思い出に残る活動をしようにと考えて分室に参加したそうです。「企画会議でのプレゼンやガイドをやらせてもらったので、人前で話す自信ができました。就職活動を控えています。いろいろな経験をさせてもらう中で自分がやりたいこともハッキリしました。大学内の友だちも「気が増えて、気が付くとキャンパスライフも様変わり、分室に参加していいことだらけですよ」と笑います。

2人の先輩、経済学部2年の福井さんは、サポートメンバーのつもりで、おそろおそろ参加しました。「でも1回参加してみたら楽しくて、気が付けばコアメンバーになっていました」。香川大学分室のオリジナルTシャツのイラストを担当し、日によっては男木島のガイドのリーダーを務めるなど、自分でも驚くほど積極的になっていったそうです。

分室のメンバーは、それぞれ自分で考えて活動に参加していくので、海の生き物をテーマに、青森のねぶたの技法を使ったオブジェで、街にあかりを灯す「海あかりプロジェクト」やフェリーのお見送り「いってラッ隊」など、会期中、ほかにも多くの活動をサポートしています。内に熱いパッションを秘めた学生の献身が、芸術祭をさやかに盛り上げました。